明治維新と淨土宗僧侶の動向

佐藤密雄

一　維新運動と淨土宗僧侶

德川中期の文化の成熟期を過ぎる頃反動的役割を帶びた國學勃興と神道主義的國民思想の流行は、德川政權への批判となり、文化、思想の支配者たる儒佛二道への反擊となつて、是れを機會として支配層にも被支配層にも尊王を具體化した一大改革が必然なものとして豫感せられた。現實爲政の上層部は、混亂なき改革實現に惱み保守的漸進的であつたが、豫感せらるゝ革新と爲政の現實の自主性なき相狀とは一般民衆及び依存的知識階級をして見えざる壓迫を感ぜしめ、不安の非常時態へ導くに到つた。新思態の實動者は、半ば現實支配層に發言の地盤を確保し、半ば現實施政に自由批搬者たり得る人々を中軸として、全き自由人を外廓運動者に持つて現はれた。然も革新の思想は上下すべてが異論なき尊王思想を大前提とし、口實は何人が立つとしても進退兩難に陷らしめらるゝ攘夷であつた。文久三年八月十八日迄の事變のすべては此の進みに現はれた具體相の數々であつた。然し維新完成迄のすべての動きは尊王を河底として流れた時代の進みで、幕末を色彩つた討幕・公武合體・攘夷・開港の論も、薩賊・會奸・討長の叫びも、すべては時代の進み行く流れに現はれたひしめきと見るべきであつた。

安政・萬延から文久の初めに華やかに振舞つた長州及び勤王浪士は血氣に過ぎた硬論を以つて幕政破壞の一歩前迄進んだが、血氣志士の擧が蹉跌し(寺田屋事變)、此れにつゞく①大和行幸の決行が靑蓮院中川宮の非常出馬に依つて失敗に歸し(文久三年八月十八日政變)、若き七公卿の退京、長藩の失脚となつて急革論は後退し漸進論の軌道が敷かれた。

人は此の文久三年より第二征長失敗迄の公武合體派全盛期を以つて維新運動の一時的停頓と見るであらうが、此の時期こそ、國家安泰裡に大復古政治に到らしめた良き胎動期であつた。此の期に成立した政權は將軍後見慶喜と會津・桑名・越前の幕府親藩に、王政復古派の土佐・薩摩・近衞忠凞等を合體せるもので、後者が急革の激論を抑壓しつゝも改革へ向はせた具體的推進力であつた。②淨土宗の思想家達が、其の活躍の指導的役割を持つたのも此の期であつた。

元來淨土宗は三河以來德川氏の奉宗であり德川政權の保護の下に隆盛を續けて來たものであるが、然し、開祖法然上人が三帝に授戒を捧げて以來七百年間諡號宣下十數度、德川初期以來親王を門主に奉戴し、一宗全般「今上天皇寶祚延長」の寶牌を奉安、日夕「天下和順日月淸明風雨以時災礪不起國豊民安」の經文を誦する特種の宗風を持つたものであつた。此の特種性が公幕の摩擦に惱むと共に、又たその摩擦面に自ら緩衝の役割を持つた所以でもある。又た京都には淨土宗寺院が四百近く密集し、ほとんどの堂上名門の菩提所があり、京都に來る雄藩の大概が是れを宿坊とせることも一つの大きな要件をなすものであつた。

淨土宗僧侶が志士浪人的行動をなしたのは、江戸で刺殺された處靜院琳瑞、京都を追はれた下の森西正寺護明等が知らるゝ位で、甚だ少ない。然し維新史上に淨土宗を代表して居た知恩院學天・上善寺秀瑞・黑谷定圓・淨福寺德禪等は當時の公武の代表者慶善・容保・春嶽・島津と相ひ關係し、そのよき指導者たり助力者であつた。學天は文久元年關東より來れる人、其の奉ずる門主の宮は御年若かりしも、境地を同じくして靑蓮院に公武合體派の盟主中川親王あり、皇

妹の御降嫁に、公武の斡旋に、慶喜・家茂の爲に働いたのである。黑谷定圓は隱れたる容保裏面の人であり、秀瑞は春嶽の同復者、德禪は近衞・薩藩・直指庵村岡の間に往來する人であつた。

禁裡內道場淸淨華院に國泰安隱の香煙が上り、江戶增上寺護國黑本尊へ靜寬院宮の御百度がある頃、淨土宗の政治的觸角は知恩院・黑谷・上善寺・淨福寺こ移り、やがて下鳥羽法傳寺に官軍の陣を見る上に及んで鳥羽伏見の合戰は決した。

二　黑谷定圓と會津容保

黑谷日鑑③に「去る十月下旬より、伊勢兩宮始め神社佛閣の御札並金銀賽錢等晝夜こなく多分に市中へ蒼降し、夫故軒別に靑竹を立て注連を張り候由、酒宴を設け其上、老若男女色別なく緋縮緬友遲等の揃ひ伴天着用致し、或ひは男女相翻じ區々美麗を盡し市街に溢れ口々にエヽジャナイカ〳〵〳〵こ唱へ云云」こ記す。其れは慶應三年末の記事であるが文久政變以來靜平であるかの如き民心も僅か四年の間にかゝる迷信的異變に引づらる迄に至り、將に大改革の前夜を思はすに至つて居る。かゝる中に御所こ市民安泰に努力せるのが會津中將容保であつた。容保が定圓僧正の黑谷に本陣を置き京都守護職こして參內拜謁を賜ふたのは文久三年正月二日であつた。

光明天皇の將軍家茂に下されたる勅に、「無謀の攘夷は實に朕の好む所に非ず。朕思ふに古來中興の大業を成す者は其人を詮衡す。苟も其の人を得ざれば中道にして蹉跌す。今三百の武將を見るに會津中將・越前々中將・伊達侍從・土佐前侍從・島津少將の如き忠實純厚思慮宏遠、國家樞機に任ずるに足る」(元治元・一・一五)「昇平二百餘年威武の以つて外冠を制壓するに足らざるを如何せん、妄に膺懲の典を擧げんこすれば國家不測の禍ひを招かんこするを恐る」、「豈圖

んや、藤原實美等鄙野匹夫の暴論を信用し、宇内の形勢を察せず、國家の危殆を思はず、朕が命を矯め輕卒に攘夷の令を布告し」とある。此の勅命に現はるゝ思想こそ文久政變の指導精神であり、容保の行動の一切が基づく所であつた。

會津・越前・土佐・伊達・島津等の合體政權は思ふに威勢隆々全都を壓するものがあつたであろうが、威必ずしも民心を鎮めず、文久政變の中川親王と容保の要擊を目指して長藩士及び浪士の暗躍ははげしく池田屋事變・元治甲子禁門の變を起し、黑谷本陣から繰出す京都守護の會津藩士の努力は慘に近き苦闘であつた。

黑谷門主定圓は尾張高須の出、會津容保も亦た高津藩の出身であつた。容保に取つて定圓は風流の友、生死解脱の師である。黑谷の僧徒は日々に失はるゝ會津武士に「あたら若き美しき武士を失ふ！」と悼句を捧ぐるが、打つも打たるゝも尊王の志であり、容保に堪え難き苦惱であつた。定圓に說かるゝまゝに「志無虛郭行必正、直游居有常必就有德」を自書して座右に掛けて自らの依處とした(現黑谷紫雲石在)。「心しづかにくむものを、なぎなる神のをごろかすらん」とは彼れが定圓に示した歌であるが、平靜ならんとしてなり得ざる苦心を定圓にさとされつゝ京師警護に向つたと言ふべきである。

容保は嘗つて幕府に勅使待遇の途を改變せしめた尊王の士であり、勤王志士の矯激彈壓の緩和を慶喜・春嶽と策したのである。然し名分を重じ、民心の安定は定圓の主張する所、禁裡都下の取締の重大性の前には、嚴重な取締がなされねばならなかつた。志士に取つての會奸は職として取るべきの途に誤りなかつたのである。

容保は一方に民心の安定、窮民の救濟を忘れず米の施與を怠らなかつたことを黑谷日鑑は記す(文久三・六)。薩長連合成つて、容保が德川內府・桑名侯と下阪したのは日鑑に依れば慶應三年十二月十二日で「御氣の毒のこと」と言ふ送別の辭に黑谷一山の涙が思ひ浮べられる。然し容保の床しさと定圓への感謝はやがて討薩軍を京師に向けんとする中にあ

つても、金品を贈つて黒谷を去つた挨拶(同上廿日)をなして居る。

定圓は容保のよき指導昔であつたが、同時に彼れは自家の識見から、元治甲子の戰歿者の追悼を一山に令し、新政府成るや岩倉具視を助け白銀五十枚を献じ門末を督勵して献金せしめつゝあつた。

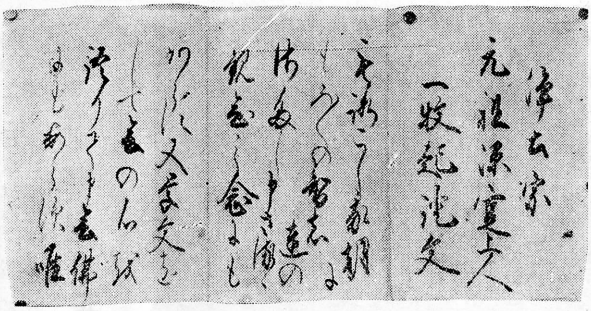
三　春嶽と秀瑞

理譽秀瑞は京都鞍馬口上善寺三十三世、詳細の記錄はないが、寺傳する所に依れば日夕古事記を愛讀し、神皇正統に卓見を持ち加茂の神官に是れを講じたと言はるゝ人、上善寺は菊亭・室町・藪・四條・東園・中園・北大路・嵯峨等の堂上公卿寺院であり、越前家の墓をも有する。中川宮の指導精神に依り公武合體に奔走せる知恩院學天の片腕として活躍せることは、學天の感狀(上善寺現存)に依つて知られる。

松平春嶽は島津兄弟とよく、島津篤子の將軍繼室入臺を策し、和宮御降嫁に努力せる人、早くも政治總裁として京師にあつたが、文久以前の狀勢に志を得ず自ら京を去り、文久政變後再び政局に登上したのである。彼の功業は此處で述ぶる迄もないが、彼れが京師に來るや上善寺に多く居して、常に秀瑞と談じ同寺公卿の間」に於いて公卿と時局を策しつゝあつたことである。秀瑞に傾到することと深かりしは、彼れが秀瑞を勸誡師として公卿・女官・幕閣の重臣を結緣して大五重相傳會を營んで居ることである。五重相傳會は七日間結緣の人々を籠らせて外部と絶つて念佛結盟することであり、(此の五重相傳會に和宮も會せられしと今に古老は傳へるが明らかでない。)將に公武合體の實質的方策とも言ふべきである。(此の記錄は十年前に上善先住が所持されたが、近日同寺に訪ねたるも見出せず、結盟の人々の名が判明しない。)春嶽が元治甲子禁門に迎へ戰つた長藩士の首(入江九一、原道太、半田門吉、奈須俊平、田村育藏、緒方彌左衛門、小橋友之輔、余一人=上善寺過去

帳に依る)を托されて葬つたのも上善寺秀瑞であつた。

四　直指庵村岡と德禪



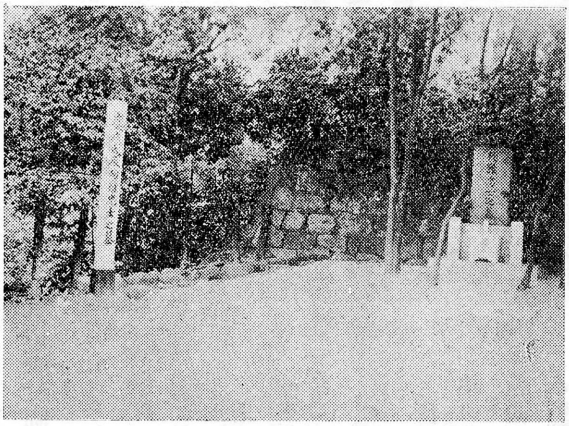
(文請起枚一習手筆岡村)

④直指庵は嵯峨北邊の淨土宗の尼寺であるが、安政の末年から此處に住して居たのは嘗ての近衞家老女村岡矩子の後身である。津崎氏(嵯峨稱念寺檀徒)の出、十三歳近衞家に入り、將軍繼室天障院が近衞家養女として入臺の折には養母格として江戸に登城し、安政の大獄には、近衞家にあつて志士と交り、安政五年水戸藩への密勅下賜を努力したる爲めに、梅田源次郎、賴三樹三郎等と共に捉へられて江戸に送られた。三十日の禁錮にして許された後嵯峨にあつて念佛生活に入つたのである。表面の生活は姪の壽仙尼に一枚起謂文を手習はせ、日夕淸涼寺に參向する善女人であつたが、時は近衞關白を中心に、維新前最後の策謀たる薩長連合の事前工作が西鄕に依つて運ばるゝ時であり、薩摩のたむろする淨福寺德禪の訪れ、大島吉之助(嵯峨古老の談に依れば西鄕は馬を引い訪れたと言ふ)の來往、近衞關白忠熙の嵯峨行(忠熙は直指庵よりも淸涼寺內の藥師寺へ來た樣で、此處には忠熙の染筆、村岡の納額等がある)等に依つて此の直指庵が薩長連合の運びの一策謀地となつて居たのである。

淨福寺は近衞・柳原其の他の公卿寺院で薩藩志士の頓所となつた所、住職德禪は終始村岡と行動を共にし、寺傳に依れば、每夜裏門から出で近衞家嵯峨を往來して未明

に歸つたと言はれる。然し今日同寺には記錄存ぜず、志士の刀痕・薩人の祀堂が存するのみである。

五



（學天忠死難殉立建の墓）

慶應三年十二月十五日大雲院北條的門が江州八幡西光寺に出した手紙⑥に、「關白中川宮先じて差控、議奏傳奏守護職所司代奉行迄被廢候……將軍十二日夜より十三日曉天迄二條城引拂大阪へ御引越相成り候……一、王征復古と申付先づ不執敢三職と申事相定候。左に申上候。（三職列名あり）。一、德川公幾土產市中へ米五萬石金五千兩被下候由、是は大出來に御座候、右故歎買物白米賣升にて六十七十も下落の由相聞候。右等の事故上下の騷動御遙察可有候云々」とあり此の後に萬一政變に依る混亂の際は知恩院祖像を江州に、門跡御殿を醍醐三寶院へ移す準備すべきことを記して居る。公武合體政權の下に華やかなりし淨土宗も德川家の沒落、公武合體政治終末が宗門人を慘めな不安に陷入れしめたことが知られる。

然し此の間に知恩院學天は明治元年二月四日參內し、（知恩院日鑑）、新政權翼讃の爲めに門末に令して勤王證書の提出、東幸献金五萬兩の募金を完成して献上し、江戸增上寺の十萬兩献金と相應じたのである。學天が知恩院境內に殉難忠死の墓（現存）を立てたのは明治元年九月で、伏見鳥羽の戰ひは正月三日であるから、恐らくは忠魂碑中の最も

古きものである。その撰文に曰く「頃年有抗朝命者、勅諸藩征之殺傷甚多、殉難者不可勝記、無堪惻隱之至、因聞之官聽、修追福齋會、且樹立墓竭以慰忠魂」と、同廿五・廿六・廿七日三日間に亙る法要を修して是れを弔つて居る。

其の後の淨土宗は、押寄せる排佛の論に、徹定の高祖敬神錄出で、「神道根本儒佛兩翼」の標識を指令して新政に應ぜんとしたのであつた。

註①浪士眞木和泉の獻策に依り急進論者が天皇の神武帝陵御拜を願ひ攘夷を宣し、幕府應ぜざれば直ちに討幕の師を起さんとするものであるが此れに對する當時の主腦部の考へは、近衛關白が此度の行幸は三條初め若手の暴公卿が迫つて御願ひ申したので……何分にも其の勢力が强くて仕方がない。其の實公卿の連中に元氣のある人は僅かで御座いまして浮浪等が尻押しをしたのであると語つて居る如く、又第二項に引用した孝明天皇の詔勅に見らるゝ如く全くの無理押しで、宇内の大勢を知るものに、明白にその無暴さが畏れられて居た擧であつた。

②此の政權は他面より見る時は、兩派に信望ある近衛公が島津等の王復古派と幕府方の公武合體派を結合して成立せしめたもので此の間に改革の具體策を見出さんとした一種の近衛政權であつた。

③黑谷日鑑は德川中期より今日迄完全に記されてなく、先年の災にも難を免れた。特に維新前後のものには(索引)迄作られてある。維新前後特に會津の動向を中心とした、庶民の狀態を知る好資料で、維新史を訂正すべき幾多の記述がある。

④直指庵はもと黃檗宗、村岡在住以來淨土宗となつたもので、同庵には村岡の江戸行日記其の他、村岡、近衛家三代の多くの史料が現存する。特に手習本「法然上人一枚起請文」は、村岡が弟子の手習に作つたもの、美事な筆蹟のものである。

⑤知恩院日鑑は德川期のものから今日迄のものが現存する。知恩院へ度々の慶喜家茂の參詣その他諸藩の動向特に皇武合體派と淨土宗の僧侶の動向を知る好資料である。

⑥現在江州八幡西光寺にあるもの。